

課題 「姉弟」

「芝居」

人物

西野卓也（29）（15）俳優

佐藤ゆり（32）（18）西野の異母姉弟

白柳藤子（72）大御所のタレント

池下葵（22）タレント

A D

○車道

都内を走らせている赤い車がみえる。

○車の中

派手目のスーツ姿でストールをまとった
佐藤ゆり（ωω）が、独りで運転をしている。
る。

○スタジオ

トーク番組の収録中。

西野卓也（26）と白柳藤子（72）が対
談中。

白柳「アラじゃあこのシーンは、お姉さんとの
思い出？」

卓也「そうですね。どしゃぶりだったんです
けど、ずっと手を握ってくれて」

藤子「心細いんですねえ」

卓也「はい。寒かったんですけど、手だけは
熱くて。でも独りじゃないなあって子供

心に思ったんですよ。その話を監督に話したら、このシーンを提案されて：」

○車の中

ゆりは、信号待ち中。

「10歳くらいの女の子がの歳くらいの男の子の手をひいて横断歩道を渡っている。」

ゆり「まったく、親はなにしてるの」

そう言いつつ、ゆりの子供達を見る目は少しうれしそうな表情。

○スタジオ・

終始、藤子も卓也も「く用の笑顔を浮かべている。」

藤子「そうだったんですね。ファンの皆さん聞きました？お姉さんですよ」

卓也「いやあ、そういうつもりじゃ」

藤子「いえいえ、みんなきつと安心してますよ。いくら演技とはいえねえ。迫真の演技

でしたからね」

卓也「そう言っていただけると光栄ですね」

藤子「私もホントに光栄ですわあ」

AD「はい、」で切りまーす」

カメラが止まり、スタイリストが藤子の
スタイリングを直し始める。

卓也は、先ほどの笑顔は消えており、無
表情に暗いスタジオの隅を眺めている。

○トンネルの中

ゆり、暗いトンネルの中、車を運転して
いる。ゆりの顔に時々光があたっている
。

○卓也のマンション・リビング

カーテン越しに光が入っている。

広いリビングに大きなテレビがあり

先ほどのトーク番組が流れている。

リビングの隣のベッドルームで声が聞
こえてくる。

○同・ベッドルーム

ベッドで裸の卓也と池下葵（22）がじ

ゃれ合っている。

葵「ちよ、やだあ」

卓也「いいじゃん。まだ時間あるし」

葵「さつきもしたでしょ」

卓也「いいじゃん、もう一回」

葵「私この後、仕事なの」

卓也「へー」

葵「何？」

卓也「俺も、打ち合わせ」

葵「じゃあ仕事して：や、待って：くすぐつ

た：：」

卓也「え？気持ちいい、じゃないの？」

葵「そんなこと：あ」

葵の声色が変わる。

卓也「ほーら、やっぱり」

葵「卓が変なところ触るから：」

葵の声とベッドの軋む音が部屋に響く。

○ 同・リビング

髪の毛が濡れたままの卓也がリビングでくつろいでいる。

メイクをした葵がでてくる。

葵「じゃあ、先いくね」

卓也「（葵の顔も見ずに）：ああ」

葵、そのまま卓也をみている。

卓也「（視線に気が付いて）え？」

葵「べつつにー」

卓也「なんだよ。後で連絡すっから」

葵「ふーん？」

卓也「当たり前だろ」

葵「じゃあ：待ってよっかなー」

葵、子供っぽく笑う。

卓也、葵に近づき胸にキスをしようとする。
る。

葵「だーめ」

そう言いながら、満足そうな顔をして

胸にキスさせる葵。

○ 卓也のマンション・外観（夜）

ゆりの車が駐車場に入っていく。

○ 同・室内（夜）

卓也、一人、リビングのソファでテレビを見ている。

テレビの画面では制服姿の高校生の恋愛ドラマが放送されている。

○（夢の中）高校・教室

窓の外は、どしゃぶりの雨。

誰もいない教室に卓也（26）がいる。

窓の外をみると制服姿のゆり（18）と卓也（15）が手を握り合って、雨の中に立っている。

ゆり、握っていた手を放そうとする

卓也はその手を離さない。

ゆり「：なんで？」

卓也「なんで、じゃないだろ」

ゆり「姉弟（きょうだい）なんだよ？ 私たち」

卓也「だから何？」

卓也、ゆりの手をひっぱり、自分のほうに引き寄せる。

ゆり「もう卓とはいっしょにいない」

卓也「そんなの無理」

卓也、ゆりを抱きしめる。

ゆりの顔に雨が流れていく。

○卓也のマンション・室内

卓也、ソファで転寝していたが目が覚め、自分にストールがかけてある事に気が付く。

卓也「…姉さん？（ゆりに聞こえる声で）きたの？」

バスルームの方から音がする。

ゆりの声「脱いだ服はちゃんと洗濯機にいれてって」

卓也「ああ…（大きな声で）ごめんー」

そう言いつつ卓也、ストールの匂いを

嗅いでいる。

○同・バスルーム

ゆり、床に落ちている女物の安っぽいピ
アスを拾う。

キラキラ光るピアスを光にかざした後に
、そのピアスをゴミ箱に捨てる。

○同・リビング

リビングのテーブルの上には大量の資料
や台本が置かれている。

その資料に目を通してしている卓也。

一方、ゆりは電話をしている。

ゆり「そうですね。こちらとしてはその方向
で。はいスケジュール的には大丈夫で：は
い、佐藤にとっても今までにない役で：そ
れは：はい、大丈夫かと」

ゆりが仕事の電話をしている姿を見る
卓也。

ゆり「：はい。そのように対処します」

ゆり、電話を切る。

ゆり「なに？」

卓也「べつに：」

ゆり「変なの。それよりちゃんとそれ読んで

よね？」

卓也「読んだよ」

ゆり「じゃあ、その映画の件すすめるから」

卓也「コレ、やだね」

ゆり「なんで？！こないいい仕事」

卓也「相手役の女、なんで年上の設定？」

ゆり「知るわけないでしょ、私がそんなの」

卓也「意味がわかんないから無理」

ゆり「ちよつと、そんな理由で仕事断れ：」

卓也「そんな理由？俺が演じるんだけど？」

ゆり「：」

卓也「そういう細かい事が大事だろ。マネー

ジャーならそこわかれよ」

ゆり「：何それ。偉そうにして」

ゆり、話にならないと卓也から離れよ

うとする。

卓也「：なんで、この仕事うけた？」

ゆり「うけるでしょ。こんな良い役なら」

卓也「そういうことは聞いてない」

ゆり「じゃあどういう意味：」

卓也は真剣な目でゆりを見ている。

その時、洗濯機終了の音楽が流れる。

卓也「：姉さん」

ゆり「：今、仕事中」

卓也「姉さん」

ゆり「だから仕事中はその言い方はやめて」

卓也「じゃあ：ゆり」

ゆり、バスルームに逃げ込む。

○同・バスルーム

ゆり、小刻みに手が震えている。

ゴミ箱の中には、キラキラ光るピアスが
見える。